

ジョルジュ・サンドの 田園小説 4 部作における偏見と悪評

稲 田 啓 子

は じ め に

ジョルジュ・サンドは生涯を通して、不釣り合いな結婚（*mésalliance*）が成立する過程を描き続けた。これには彼女の二重（貴族と庶民）の血筋が大きく影響しているのかもしれないが、不釣り合いな結婚がもたらす「愛と理性的分別（すなわち身分結婚と金銭結婚）の葛藤」⁽¹⁾は、そもそもサンドの小説に限ったものではなく、今日に至るまで多くの文学作品の主題となっている。但し、サンドの作品において階級ないし境遇の異なる者同士が結婚に及ぶ場合、その上位に位置する者（主に貴族）は常に、自分の身分や財産にこだわることなく、それらを潔く犠牲にする。これは恐らく、他の作家にはあまり見られないサンド小説の特徴である。このような傾向は特に、1840年代前半にサンドが描いた『コンスエロ』（*Consuelo*）と続編『ルドルシュタット伯爵夫人』（*La Comtesse de Rudolstadt*）や『アンジボーの粉ひき』（*Le Meunier d'Angibault*）などに強く表れており、これらはふつう、ジョルジュ・サンドの社会主義小説と呼ばれている。

社会主義小説に比べると、田園小説におけるカップルの対立構造の在り方は一見みえにくい。その理由の一つに、田園小説 4 部作の登場人物がみな、主にベリー地方を中心とした田園地帯で暮らす農民であるという点を挙げることが出来るだろう。サンドはこれまでも『ヴァランティーヌ』（*Valentine*）や『ジャンヌ』（*Jeanne*）などで農民たちを描いていたが、田園小説 4 部作では

じめて、彼らを主役に押し上げたのである⁽²⁾。しかし、当然のことながら同じ農民であっても富むものとそうでないものとが必ず居るわけで、サンドは田園小説の中で決まって、結婚を望む男女の間に大きな経済格差を設けている。19 世紀に台頭してきたブルジョワの間では、結婚における当事者双方の意思表示は建前に過ぎず、結局資本の維持増殖を目的とする家族の意見が重視されていた。このようなブルジョワ意識が、やがて裕福な農民たちの間でも強まることになる。それゆえ田園地帯の若い男女が経済的に不釣り合いな結婚をしようとすると、貴族やブルジョアと同様に彼らもまた、家族の根強い反対に遭うことがあったのである。

田園小説 4 部作では先に述べた経済格差に限らず、様々な点で相反する境遇に在る男女の恋愛成就を共通のテーマとしており、それを阻むものも一貫している。裕福な家族や友人が抱く社会的に不利な立場の人間に対する容赦ない偏見と、村人たちによってばらまかれる無責任な悪評とがこれである。とはいえ結婚の成立に向けて、あらゆる偏見は最終的に打ち消され、悪評は覆される。これらはまさに、不釣り合いな結婚が果たされる過程で物語を左右する要となっているのである。本稿では、結婚が象徴する異なるものの融和において、その障害となる偏見と悪評が田園小説の農民たちの間でいかに解消されていくか検討してみたい。

1. 『魔の沼』 *La Mare au Diable*

田園小説 4 部作はいずれも、土地の語り部が語る形をとった物語である。『魔の沼』(1846)では、ジェルマンという一農夫の身の上話が語られており、それはジェルマンの舅のモーリスが、彼に再婚話を持ちかける場面から始まる。冒頭でジェルマンは舅から、再婚相手に若い娘は不適格だと釘を刺される。舅の話では、若い女は何かと軽薄だというのである。モーリスは、カトリーヌという 32 歳の女性をジェルマンにしきりに勧める。なぜならカトリーヌは評判が良いし、その家族もみんな立派でおまけに財産もあるからだ。つま

り、のちにジェルマンが恋をする16歳のマリーにとって完全に不利な条件が、ここで舅によって提示されるのである。裕福な上に、「ベレール村の間では誠実で真つ当な人たちだと評判」⁽³⁾のモーリス一家に比べ、マリーの家はひどく貧しい。彼女の貧しさと若さを理由に、語り手は「ジェルマンがマリーを嫁にしたいと考えるのは有り得ないことだ」⁽⁴⁾と先に強調しておくが、物語はその前提に逆らう形で進んでいく。ジェルマンがマリーに好意を抱くきっかけとなるのは、作品のタイトルになっている「魔の沼」である。森の中で彼らは「魔の沼」に行く手を遮られ、ジェルマンの長男ピエールを囲んで森で一夜を過ごす。そのときジェルマンはマリーの賢さと優しさを知り、やがて彼女を自分の妻にと望むが、その申し出は年齢に対するマリーの偏見によって拒否される。

『魔の沼』においては、ジェルマンとマリーの家の経済格差もさることながら、何より年齢差が2人を阻む大きな問題となっている。但し、年の差のあるカップルをよしとしない考え方は、当時の普遍的な考え方ではなく、むしろベリー地方特有のものだといえる。というのも貴族やブルジョワの間では、年が親子ほど違う男女の結婚も、そう珍しいことではなかったからである。「黒い谷（vallée Noire）の農民の男は若いうちに結婚するので、30歳で結婚するとなると年をとり過ぎていると見なされる」⁽⁵⁾というサンドの言からすれば、マリーが28歳のジェルマンを自分の結婚相手には年寄り過ぎると断言し、彼と結婚したりすれば仲間たちから笑われてしまうと恐れるのも、ある地域の農民に特有の土着的な偏見によるものだと考えてよい。もっとも、そのような偏見を抜きにしてもマリーが懸念するのは、カトリーヌを嫁に貰うことをひたすら期待しているモーリスの存在である。ジェルマンは当初の予定通り、後家のカトリーヌと会ってみるのだが、この後家との見合いによって、ジェルマンとマリーの置かれた状況は逆に好転することになる。実際のカトリーヌは自惚れの強い横柄な女で、モーリスが言っていたようなまじめで身持ちのいい人間では全くなかった。カトリーヌに関する評判は、事実を捉えてはいなかったわけである。

ジェルマンとマリーの結婚を妨害するものは、年齢と財産に対する偏見のみであるため、他の田園小説と比べると『魔の沼』における対立項の解消はいささか容易に実現される。ここで注意しておきたいのだが、偏見と悪評は基本的に同じものではない。確かに悪評は、潜在的な偏見を言い表したり強めたりすることもある。しかし偏見が認知体系の一部であるのに対し、悪評は本質的に、現実的な出来事なのだ。言い替えれば、偏見は持続的な一種の思い込みとその広まりを意味するが、悪評は世情に応じてその都度起きる現象である。但し『魔の沼』における偏見は、あくまで個人の意識によるものだから、その解消は一对一の間で成立する。物語の最後にジェルマンの姑が現れ、抜き差しならぬ恋に悩む彼を後押しする場面からも、このことが確認出来るだろう。姑には、嫁の実家の財産を重視する舅モーリスとそれにこだわらないジェルマンを和解させる媒介としての役割が与えられている。ある日果物畑で2人きりになったとき、姑は優しくジェルマンに話し掛ける。

「(...) お前さんになくってはならない女性がどこにいるのか分かっているなら、その人を貰いなさい。その女性が美しかろうと醜かろうと、若かろうとそうでなかろうと、金持ちだろうと貧乏だろうと、そんなことは構わないのですよ。」⁽⁶⁾

この姑の言葉が、物語の冒頭で語られたモーリスの偏見の全てをあっさり否定する。これまで他者の偏見に押さえつけられていたジェルマン本人の意思に、突然光が当てられるのである。姑の働きでモーリスはついにマリーを嫁に取ることを認め、ここでジェルマンとマリーの間に横たわっていた障害が姿を消す。実は舅と姑の容認こそ、マリーがジェルマンの申し出を受ける上で最も必要なものであった。サンドが描くヒロインは大抵、たとえどんなに不釣り合いな結婚であろうと、何よりもまず家族の承認と祝福を求めるのだが、マリーもその例外ではないのである。

マリーとジェルマンが盛大に結婚式を挙げ、村中の人たちの祝福を受けたと

ころで物語は終わる。2 人の結婚を遮り続けた財産と年齢に対する偏見は、結局姑一人の働きで一举に解かれるせいもあってか、『魔の沼』の作品構造には単純さが目立つ点を否定することは出来ない。しかしサンドは序文の中で、読者に向かって「私は単純なものの中に、美しいものを見て、感じ取ったのです」⁽⁷⁾と語っている。つまり、交流と理解の妨げになる偏見にしばしば囚われつつも、それを最終的には放棄し団結していくような、一見単純に見える農民たちの姿こそ、サンドが抱く美の具現だったのだといえるだろう。性急で容易な印象を受ける『魔の沼』の偏見の解消は、逆に作者の目論見どおり、農民たちの純朴さと優しさを際立たせているのである。

2. 『捨て子フランソワ』 *François le Champi*

『捨て子フランソワ』（1847）は、麻打ちと司祭の家の女中が語る捨て子の物語である。この作品においても対照的な境遇に在る男女の恋愛成就が大きな主題となっているが、『魔の沼』に比べると彼らが越えなければならないハードルはさらに高い。物語は、泉の傍で座り込んでいるフランソワをマドレーヌが見つけたところから始まっており、この時フランソワはおよそ 6 歳、マドレーヌは 18 歳である。2 人の年齢差の問題も大きいが、フランソワは捨て子で、マドレーヌは既に結婚していて赤ん坊まで居るという設定であるため、やがてフランソワが青年になったときに芽生える彼らの恋は、多方面から阻まれる。但し、フランソワとマドレーヌの関係には 2 段階あり、フランソワが少年の頃の彼らは、ほとんど母と子の関係に近いものだった。それゆえ物語の前半では、捨て子に対する村人たちの根強い偏見と、そこからフランソワを護ろうとするマドレーヌの母性が繰り返し語られるにとどまり、2 人の意識に変化が現れるのはずっとあとのことになっている。

捨て子への偏見が当時どのようなものであったか、それは小説の中に散りばめられた村人たちの声に注目すれば明らかになるだろう。『捨て子フランソワ』ではしばしば村人全体の意見というものに、物語を動かす大きな力が与えられ

ている。村の子供たちが馬鹿にし、マドレーヌの姑が「捨て子なんてどいつもこいつも生まれつき盗人なのさ」⁽⁸⁾と言い切るように、大抵の人たちにとって捨て子は末恐ろしい存在であると同時に蔑みの対象だったのである。フランソワは 17 歳になると、マドレーヌの夫キャデ・ブランシェによって、マドレーヌの家を追い出されてしまう。情婦のセヴェールに唆されたとはいえ、キャデ・ブランシェがフランソワとマドレーヌの仲を疑い、妻に向かって「あいつ（フランソワ）のおかげで俺は間抜けな人間になっちまう。俺は村の笑いものにはなりたくない」⁽⁹⁾と喚く場面には、夫の心理がよく表れている。キャデ・ブランシェは世間から寝取られ男と見なされ、馬鹿にされることを恐れるのである。ここで彼を脅かしているもの、それは村人たちの声、すなわち世間の声だ。小さな村社会では何事も筒抜けであり、それが醜聞であればなおさらである。このように田園小説の人物たちはしばしば、名前もなければ顔も見えない集団の声に怯えることになる。

けれども最大の妨害者キャデ・ブランシェは、物語半ばで死ぬ。捨て子を忌み嫌う姑のブランシェ婆さんもその前に病死しており、ここでは敵対者が次々と死んでいくのである。但し、それであっさり 2 人の恋が成就するわけではない。彼らは、キャデ・ブランシェが残した借金と村中に広まった悪意ある噂を相手に戦わなければならなくなる。まず借金の問題についていえば、それは比較的容易に解決される。フランソワが、本当の母親から贈られた 4000 フランを使って、夫の借金に苦しむマドレーヌを窮地から救うのである。しかし悪評を打ち消す術は、フランソワにはない。悪評をばらまくのは、キャデ・ブランシェの妹マリエットと情婦セヴェールで、彼女たちの悪意は全て、立派な青年に成長したフランソワとマドレーヌの仲に対する嫉妬から来ている。個人に打撃を与えるには、集団の声を利用することが何より効果的である。一旦悪評を立てれば、その張本人は不明のまま、好奇心を駆り立てられた「みんな」が造作なく個人攻撃のおしゃべりを始めてくれるからだ。マリエットたちは、マドレーヌが夫の存命中から既にフランソワと良い仲だったという話をでっち上げ、マドレーヌの悪口を村中に言いふらす。彼女たちの作戦は見事成功し、か

つて評判の良かったマドレーヌは悪評に塗れる。その様に胸を痛めたフランソワは、一旦村を立ち去るのである。

フランソワはなぜ村の外に出るのか。それは自分とマドレーヌの悪評で溢れた、いわば敵だらけの村の中で、居場所をなくしたからである。フランソワは悪評とは無縁の場所を求め、かつて奉公していたジャン・ヴェルトォの家に向かう。サンド小説では事態が悪化すると必ず、主人公が旅に出てその打開策を探るのだが、フランソワのこの行動にもそれと同じ傾向を見ることが出来る。いずれにせよ、その試みは功を奏し、フランソワはそこでジャン・ヴェルトォの娘ジャネットという強力な支持者を得るのである。ジャネットはフランソワの話に耳を傾け、そして「あなたはマドレーヌ・ブランシェを愛しているのね。母親としてではなく、若さと魅力を持った一人の女性として彼女を想っているのよ」⁽¹⁰⁾と断言する。それまで自覚のなかったフランソワの曖昧な感情は、ここから完全に、母親を想う子供の愛情から恋の情熱へと移行することになる⁽¹¹⁾。けれどもフランソワとマドレーヌの関係は、村に広まった悪評が示すようないかがわしいものではなく、完全に潔白である。

そんなフランソワの恋の話に心を動かされたジャネットとジャン・ヴェルトォは、彼の恋の成就に力を貸すためマドレーヌの元へ急ぐ。村の外からやって来た支持者たちは、悪評も敵対者も一切無視して、フランソワとマドレーヌを結びつけるために働くのである。そうして捨て子フランソワの恋物語は「彼らの結婚式は、わしが今まで見たこともないくらい一番立派で上品で、そして愉快だった」⁽¹²⁾という麻打ちの言葉と共に終了する。

のどかな田園を背景に描かれるのは、素朴で善良な農民たちばかりではない。むしろこの小説では、捨て子を憎み始める者、他人の財産を奪おうとする者、そして悪評を立てて他人を貶める者など、腹黒い農民たちも随分多く登場する。このような村社会における捨て子への偏見は、フランソワの成長を通して徐々に見直されていく。つまり、本来盗人や悪人になりやすい捨て子が立派な青年になったことによって、村人たちが根強く抱いていた偏見は揺らぎ出すのである。もちろん、それに至るには少年フランソワが青年になるまでの長

い期間が必要であった。捨て子フランソワは偏見と悪評の解消に時間と労力を注ぎ、その結果、最終的にマドレーヌとの結婚という形で幸福を手にする。それには、フランソワ個人の努力だけでなく、社会的偏見を超えて捨て子を慈しみ、熱心に教育したマドレーヌの存在も大きく関わっている。彼女が居たからこそ、フランソワは多くの捨て子の例に反して、立派な人間になったとも考えられよう。フランソワとマドレーヌの在り方を通して、子供に注ぐ教育と愛情の大切さを確認することが出来る。

3. 『愛の妖精』 *La Petite Fadette*

田園小説 4 部作には全て、作者による「前書き」が付されており、その中で作者の芸術観や自然観を知ることが出来るのだが、ただ『愛の妖精』(1849)の前書きのみ他と比べて趣が異なっている。ここで作者は、現実社会における不幸と絶望を強い調子で述べ、そしてそのような中で果たされるべき芸術家の使命を明らかにする。これには 1848 年に起きた二月革命が大きく関わっている。そこでまず、サンドと二月革命の関わりについて概観することにする。

1830 年から始まった七月王政によって産業革命が進められていたフランスでは、40 年代に入ると中小ブルジョワや労働者が選挙権を求める声が強まっていた。そして 1847 年になると各地で労働者や社会主義者達が集い、改革宴会が開かれるようになる。しかし政府がこの運動の弾圧に乗り出したため、怒りを爆発させた民衆はパリで暴動を起こす。その結果、ルイ=フィリップの退位と共に臨時政府が設立される。これが二月革命であり、その臨時政府に加わったのが、サンドが傾倒していたルイ=ブランらをはじめとする社会主義者たちであった。多くの友人が臨時政府に加わり、貧困と差別を社会から一掃しようと努めている姿に刺激を受けたサンドは、ノアンでじっとしていられなくなる。彼女はパリに行き、政府の友人達の前で民衆の自覚を促すパンフレットを精力的に書く。労働者が政治に参加することによって、より豊かで平等な社会

を築く一種の足がかりとなると考えていたサンドはこの機会を逃すまいと必死だった。けれども臨時政府側がいかなる政策を打ち立てても、民衆の貧困が変わることはなかった。徐々にピエール＝ルルーの唱える理想論に疑問を抱き始めたサンドを待っていたのは、民衆の惨敗と仲間たちの国外追放であった。長年抱いてきた理想が破れ、サンドは深い絶望感を味わう。しかしそこからサンドは、再び田園小説を著すことを決意するのである。理想通りにならない社会だからこそ、作品の中で純粋で平等な世界を描くことによって現実には疲れた人々の心を癒したい⁽¹³⁾——これが、二月革命後のサンドの新しい信念となる。

そうして著されたのが『愛の妖精』である。ここでは偏見と悪評が前二作以上に複雑に絡み合っており、それらの解消の仕方もこれまでにない手法が取られているが、その些か大胆な解決法に違和感を覚える読者も少なからず居るかもしれない。いずれにせよ『愛の妖精』のヒロインには、物語の冒頭から既に悪評が付きまとっている。それは彼女のあだ名からも明らかに見て取れるだろう。フランソワーズという彼女の本名は小説の中で一回しか用いられず、ヒロインはふつうファデットという名で語られる。彼女の苗字ファデーに由来するファデットという呼び名には、ファデーやファルファデー又はフォレーという、ベリー地方で「鬼火の精」を指す言葉の意味合いが含まれている。ヒロインの祖母は村人たちから魔女と噂されており、彼女自身も魔法が少し使えると思われていたところから、そういう呼び名がつけられたのだ。さらにファデットには「こおろぎ」というあだ名がある。語り手は「人がファデットをこおろぎに譬えたのは、器量のいい娘ではなかったということを匂わせていて、何しろあの哀れでちっぽけな野原のこおろぎときたら、炉辺にいるこおろぎよりもっと不器量だった」⁽¹⁴⁾と付け加え、彼女のあだ名から、色黒でやせっぽちのヒロインの外見的イメージを読者に提供している。不器量で貧しいファデットは、コッス村の中で評判の芳しくない娘だったわけである。

いかなる社会においても集団の利益を守るため、そこに属する者には何らかの規則が課せられる。それを破った者には、いわゆる村八分という形でそれ相応の罰が与えられることが多く、ファデットのコッス村での位置付けは、まさ

にこの状況に等しい。妙な呪いを使って人に悪さをするという悪評がたっているために、ファデットは村社会の利益を損なう者として見なされ、村人たちの恐れと差別の的となっているのである。

このようなファデットと対照的な境遇に在るのが、のちに彼女の夫となるランドリーだ。ランドリーの家は村の議員をしているため、彼は皆から一目置かれ、さらに見た目の美しさゆえに双子の兄シルヴィネと共に村中でもてはやされている。したがって当然ファデットとランドリーの間には接点がなく、特にランドリーは当初、他の村人たちと同様に彼女を避けていた。こうした2人を結びつける役割は、ランドリーの兄シルヴィネに与えられている。このシルヴィネこそ、ランドリーとファデットの恋愛成就の鍵を握る人物なのだが、彼は物語の結末に及ぶまで、ファデットはいやな人間で、彼女と関われば何か不吉なことが起こるに違いないという偏見を持ち続ける。しかし弟を想うがゆえのシルヴィネの衝動的な行動は、例えば冒頭でシルヴィネが家出した際、兄を見つけ出せず途方に暮れていたランドリーにファデットが手を貸した場面に見られるように、結果として2人を引き合わせる機会を作るのである。

但し、ランドリーとファデットの恋愛成就における敵対者はシルヴィネだけではない。作者はここでも、その他大勢の村人たちの声を利用している。村でも評判のランドリーとほとんど村八分にされているファデットが祭りで踊ったとき、世間は敏感に反応する。踊りを見ながら、村人たちは口々に2人を嘲弄し始める。

「おい見ろよ、こおろぎのやつ、今日はついてるじゃないか。バルボーさんとこのランドリーとずっと踊ってるぜ！ なるほど、踊りはうまいもんだ。いい女になった気でカササギみたいに気取ってやがる。」中には、ランドリーに向かってこんなことを云う者もいた。「お前、あいつに呪いでもかけられたのか。しっかりしてくれよ。あいつしか目に入っていないじゃないか。まさかお前まで魔法使いになりたがっているのかい。今に狼を畑に引っ張り込むようにならないでくれよ。」⁽¹⁵⁾

ここには、個人を叩く集団の心理がよく表れている。村社会に溶け込むことの出来ない人間を疎外することで、心の安定をはかってきた村人たちの目には、ランドリーの行為は裏切りとして映ったのだ。言い換えれば、ランドリーはファデットの相手をしたために、図らずも村の暗黙の了解を破ってしまったのである。だがこの出来事が契機となって、ファデットに変化が起こる。彼女は村人たちへの口の利き方や応対に気を配り、これまでとは打って変わってしとやかな振る舞いをするようになる。ファデットの豹変は偏に、ランドリーへの恋心ゆえである。

こうした変化に目敏く反応し、ファデットに対する世間の既存の見方に一石を投じるのは、村の年寄りたちである。殊に村社会では年長者の発言が重視されがちだ。そのため年寄りたちが語る世間話には、村人全体の意見を動かす影響力と共に村で起こった問題を裁く力が備わっている。老人たちのおしゃべりに耳を傾ければ、コッス村でのファデットの悪評が徐々に拭い去られつつあることに気付くだろう。

「みんな気付いたかい。あの娘は少し前からめっきり色が白くなったじゃないか。」と、クーチュリエ婆さんが口を出した。ノーバン爺さんが言った。「(...) あの娘は今にこの土地の恥さらしになると思っていたが。このぶんなら案じたほどでもなく、だんだん娘らしくちゃんとしてくるだろうよ。」アンリ爺さんが言った。「あの娘は気立てが悪いんじゃないくて、考えなしなのさ。心根はちつとも悪くないよ (...)」クーチュリエ婆さんがまた口を出した。「ところで、これは本当の話かい。なんでも、聖アンドッシュのお祭りの日に、バルボーさんとこの双子のどっちかがあの娘に夢中になったらしいけど...」「馬鹿を云っちゃいけない！」とノーバン爺さんが答えた。「(...) あれは子供の冗談さ。何しろバルボーさんとこの子供はみんな馬鹿じゃないからな (...)」⁽¹⁶⁾

ファデットに対する世間の態度は軟化してはいるが、亭主を棄てて兵隊につい

ていったような素行の良くない母親を持ち、貧しくて育ちの悪いファデットを良家のランドリーが相手にするということには、皆やはり否定的だ。裕福で格式のある家の子供が結婚する場合、その親や親戚が重視するのは釣り合いである。要するにランドリーとファデットの結婚は、村の常識的な考えに完全に逆らうことを意味するのだ。ランドリーも以前は、そのような村のルールに倣ってか、家柄も良くて評判のいいマドロンとの結婚を考えていた。しかしマドロンの評判も『魔の沼』のカトリーヌ同様、実際の彼女を捉えてはいない。やがてマドロンの本性に気付いたランドリーは、彼女への興味を失う。いよいよランドリーはファデットとの結婚を望むようになるのだが、再び村中を駆け巡るファデットの悪評とランドリーの父親バルボーの彼女に対する偏見によって、彼の意思は阻まれる。

まずファデットの悪評を立てる張本人は、マドロンと村の若い娘たちだ。家柄も良く立派な青年であるランドリーがファデットを選んだことによって、村中の女たちが嫉妬し、ファデットを貶めるために徒党を組んで騒ぎ出す。ファデットは新たな悪評で再び村八分にされるのだ。そこで彼女が出す決断は、捨て子のフランソワと同じである。ファデットもまた、村の外に打開策を求めるわけだ。彼女は新しい村でいい評判を得ることを目的に、コッス村を離れて奉公に出る。世間からの高い評価を望むのなら、自分の悪評が渦巻く社会で粘るよりも、新たな土地でやり直すほうがいいだろう。しばらく別の集団の間で暮らしながら、そこでファデットがいい評判を得たからこそ、バルボーは最終的に息子との結婚を承諾するのである。

もちろん、バルボーがファデットに急に好意的になった大きな要因は、彼女が手にしたファデー婆さんの遺産に在るという見方も否定は出来ない。それでもバルボーの最大の気がかりは、やはりファデットに関するかつての悪評である。ファデットが奉公先のシャトー・メイヤンで世間からどういう人間に見られていたのか、それを確かめるのはバルボーであり、その結果、世間の評価に倣った彼によってファデットという人物は正当化される。

ファデットに対する世間の偏見が拭われ悪評も消え去ったあとで、それでも

まだ根強く反対しつづける者が居る。ランドリーの兄シルヴィネである。シルヴィネはファデットをずっと嫌っていたから、彼女が大事な弟の嫁になることには我慢ならなかったのだ。しかしシルヴィネのファデットに対する反発も最後まで続くことはない。ファデットがシルヴィネの病気を治したときから、シルヴィネの態度は急変する。彼はファデットに心を許し、弟との結婚を認めるのである。

こうして家族全員の許可を得て結婚したファデットは、ランドリーの土地に家を建て、そこに村の貧しい子供たちを集め、彼らの生活を助けたり読み書きを教えたりする。『アンディアナ』(*Indiana*)や『黒い町』(*La Ville Noire*)の後半にも見られるのだが、ここではファデットを中心に慈愛と信頼に基づいた、いわゆる小共同体が創られる。しかしそこにシルヴィネの姿だけはない。ファデットに対する憎しみが恋心に入れ替わったことを自覚したシルヴィネは村を離れ、ナポレオンの軍隊に入る。ある集団の中で居づらくなった人間は、やはりそれと異なる社会に身を置くしかないのである。

以上のように捉えてみると『愛の妖精』では特に、世間の目すなわち村人たちの意見を軸に、物語が動いていることが分かる。村八分にされていた少女が、その人徳によって生まれと境遇から受ける偏見を脱し、悪評をも覆してやがてコッス村を照らす中心的な人間になる。ここにおける結婚の成立は、ずっと阻害されてきたヒロインが最終的に世間に受け入れられたことを意味している。偏見と悪評が一つ一つ打ち消される間に、ファデットは村人たちの歪んだ視点から解放されていき、それまでヴェールに包まれていた彼女の真の姿が露になるのだ。読者は物語が進むにしたがって、ファデットの非の打ち所のない人間性を見出すだろう。偏見と悪評は時に人の目を曇らせ、誤解を生み出す。それらが晴れたとき初めて事実が明らかになり、ファデットは世間と和解するのである。

4. 『笛師の群れ』 *Les Maîtres Sonneurs*

これまで取り上げてきた田園小説の語り手はみな物語の外側に居る人物だったが、『笛師の群れ』（1853）では、主人公エチエンヌが自分の若い頃の話を書くという形式が取られている。ここでは2組のカップルの恋愛成就が問題となっており、その境遇も対照的だが、前3作に共通して見られる経済格差の問題は特に取り上げられていない。『笛師の群れ』の男女が当初衝突する原因は、まさに彼らが生きる「場所」に在る。エチエンヌと従姉のブリュレットがベリー地方の農民であるのに対し、彼らの伴侶となるテランスとその兄ユリエルはブルボネの森で転々と暮らす人間である。このような場所の違いは、そこで暮らす人間の性質や生き方の違いと繋がるものだ。そのため平地の農民エチエンヌと森の住人ユリエルは、お互いの価値観においてしばしば衝突する。まずユリエルが抱くベリー地方の農民に対する偏見は、次のようなものである。

「ベリーの人間は澄んだ空気を吸って、慣れた暮らしを好み、ちっともよそを見たがらない。自分の金を大事にして使おうとしない。そのくせ金を増やすことは知らないんだ。奴らは工夫することもないし、勇気なんかまるでないのさ。」⁽¹⁷⁾

森から森へと気の向くままに住まいを変え、自由に生きるユリエルにとって、一つの土地に根をおろし、そこで田畑を耕しながら一生を送るベリーの人間は理解しがたい存在である。ユリエルから見れば、彼らの生き方は保守的で、何の面白みもないものなのだ。上に挙げた言葉からも、ベリーの農民の生活に対するユリエルの一種の蔑みが窺えるだろう。いずれにせよここでは、田園小説4部作で初めてベリー地方以外の人間の、すなわち外部からの視点が導入されており、このような外側の眼を通して、これまでになかった新しい偏見が語られて

いる。一方、奔放なユリエルとは対照的な生き方のエチエンヌは「驟馬引きなんて荒っぽくて性質が悪くて、心がけのよくない連中だ。奴らは森の中で人を殺すことなんか兎でも殺すのと同じように考えているんだ。」⁽¹⁸⁾と言って、驟馬引きというユリエルの職業を直接非難する。このような考え方はエチエンヌやブリュレットだけでなく、一般の村人たちも同じであって、ベリーの人間は驟馬引きに対して相当根強い偏見を持っており、彼らをやたらと悪人扱いしている。確かに閉鎖的な村社会では、よそ者をよしとしない風潮があるが、エチエンヌたちの驟馬引きへの偏見は恐らく単にそれだけの理由ではない。大きな理由として、一つは両者の生き方が全く異なること、そしてもう一つは驟馬引きたち森の人間が、いわゆる世間の掟というものを無視して自由気ままに暮らしていることが挙げられよう。とはいえ、エチエンヌとブリュレットのこのような一方的な偏見は、ユリエル自身の誠実で思いやりのある人柄を通して打ち消される。

驟馬引きというものを毛嫌いしていたブリュレットも、やがてユリエルにだけは心を開き、2人は惹かれ合うようになる。だがそこで起きるのがブリュレットに纏わる悪評である。その出所はラムーシュの女房で、ブリュレットの家で女中をしていて首にされた女だ。ラムーシュの女房の逆恨みによって、ブリュレットが未婚のまま赤ん坊を産んだという悪評が村中に広められる。なるほどブリュレットは赤ん坊を預かり、その子の母親代わりとなって子育てをしていたが、今回も悪評は決して事実を捉えていないということを語り手は予め明かしている。悪評が村中に広まる原動力となっているのは、かつてブリュレットの取り巻きだった若い男たちだ。村の男たちはブリュレットに振られた腹いせに、示し合わせて悪評をばら撒く。これまでその役割は嫉妬に駆られた村の娘たちに与えられていたが、ここではそれが村の男たちに代えられている。但し悪評の担い手となる人間は男女問わず、相手に嫉妬を抱いているという点で同じである。この嫉妬こそが、人が人を陥れる方向へと駆り立てる根本的な感情なのだろう。

ともあれ『笛師の群れ』における悪評は、第三者の発言によってひっくり返

される。村の青年たちが酒場に集まり、ブリュレットの悪口を言い合っていたそのとき、件の赤ん坊の両親が名乗り出てブリュレットの潔白を証明するのだ。悪評がまさに一瞬にして打破されるのである。

『笛師の群れ』も、主な登場人物のいわゆる幸福な結末によって終わるが、ここでは例外的に悲惨な死を遂げる人物が居る。それはエチエンヌとブリュレットの幼馴染で後に笛師となるジョゼフだ。ジョゼフは農家の仕事もまともに出来ないし陰気で身勝手な人間だから、村の中でも浮いた存在である。ただ音楽の才能だけは秀でていたため、彼は村を飛び出し森に入って、笛師の大頭であるユリエルの父に弟子入りする。ジョゼフは新しい場所で笛の腕を磨くが、結局彼の居場所は森にもない。森の笛師たちの間で横柄な態度を取ったために彼らの不興を買い、ジョゼフは物語の最後に殺される。ジョゼフの死骸の発見場所は故郷の村でも森でもなく、そこから遠く離れ、人が怖がって近寄らないような寂しい所だ。彼は堀に張った氷の中で凍りついて死んでいたのである。自尊心と猜疑心が強く、最後まで人に溶け込むことの出来なかった音楽家の孤独が、その死に方に象徴されていると云えるだろう。ジョゼフの体を取り巻く氷は、彼の心そのものと取ることも出来る。彼は村人や森の住人はもちろんのこと、笛師仲間とも馴染もうとしない、要するにいかなる集団にも属することの出来ない人間なのだ。

物語の中でジョゼフはエゴイストと呼ばれるが、こうした側面は『愛の妖精』のシルヴィネにも通じるところがある。シルヴィネは弟への異常な執着心ゆえに周りを振り回し、物事が自分の思うようにいかないと病人のふりをして同情を誘おうとする。彼もジョゼフに劣らず大変厄介な性格であり、そのような類似は彼らの辿る運命にも見られる。シルヴィネは、ジョゼフのような死に至ることこそなかったが、軍隊に入るという形で最後には村を出るのだ。このようにサンドの田園小説では、個人主義的な人物が幸福な結末を与えられることはない。彼らは物語の過程において死をもたらされるか、集団の中から姿を消すか、そのどちらかなのである。

ところでジョゼフの死後、エチエンヌとテランス、そしてブリュレットとユ

リエルが選択した結婚後の共同生活は、平地と森の暮らしを折衷した形となっている。彼らはエチエンヌの土地に一軒の家を建て、そこで麦を育てながら、季節が変われば森に移り住むことにする。互いの生き方に偏見を持っていた者同士が、うまく折り合いをつけて暮らすのである。これを平地の農民と森の住人の融合と見ることもできるだろう。

お わ り に

サンド小説では大抵、物語の最後に小共同体が形成され、その中で人々の友情と幸福が強調される。このような傾向は恐らく、サンドが少女時代から愛読したルソーに強い影響を受けたものと考えられる。『ヌーヴェル・エロイズ』(*La Nouvelle Héloïse*)では、ジュリーを中心に全員一致の一つの世界が創られており、その限定された小共同体は、人が心を開きあい、相互にそれを見せ合えるような、絶対的信頼によって結ばれた理想的な集団である⁽¹⁹⁾。これこそサンドが願う社会の在り方であって、田園小説 4 部作の終わり方にはそれが反映されている。

言い換えれば、ジョルジュ・サンドの作品は常に、対立から融和へと流れるのだ。この流れは、サンド作品全般を通る根幹である。本稿では物語の局面に従って変化し、絶えず融和を阻む要因となる村人の偏見と悪評を見てきたわけだが、これらの現れ方や解消の方法は、恐らく田園小説 4 部作特有のものである。というのも、サンドの他の作品では、貴族社会や職人の生活が中心に描かれているからだ。集団の質が変われば、偏見の内容や悪評のたてられ方、そしてそれらの切り口も自然に変わる。その意味で田園小説は、職人と貴族といった身分違いの恋愛が描かれる 1830 年代後半から 40 年代前半のサンドの小説とは、完全に趣が異なるのである。

サンドは 1832 年の『アンディアナ』以降、約 40 年に渡って膨大な量の作品を著しつづけており、不釣り合いな結婚とそれを阻む障害は、彼女の作品の中で多かれ少なかれ一貫して見られる素材である。ただ、二月革命の挫折からサ

ンドの作風は変わったと云われている。その要因は偏に、本稿でも取り上げた障害の切り取り方にこそ在るのではないか。これからさらに対象作品を広げ、詳しく検討すべき問題である。

註

- (1) ハーバーマス『公共性の構造転換』（細谷貞雄訳），未来社，1973年，p. 68.
- (2) Marielle CAORS, *George Sand de voyages en romans*, ROYER, 1993, pp. 229–230.
- (3) George SAND, *La Mare au Diable*, Garnier Frères, 1981, p. 43.
- (4) *Ibid.*, pp. 43–44.
- (5) George SAND, *Promenades autour d'un village*, in *Œuvres complètes XXVIII*, Slatkine Reprints, 1980, p. 148.
- (6) George SAND, *La Mare au Diable*, p. 123.
- (7) *Ibid.*, p. 5.
- (8) George SAND, *François le Champi*, Garnier Frères, 1981, p. 240.
- (9) *Ibid.*, p. 286.
- (10) *Ibid.*, p. 397.
- (11) Marielle CAORS, *op. cit.*, p. 241.
- (12) George SAND, *François le Champi*, p. 403.
- (13) George SAND, *La Petite Fadette*, Garnier Frères, 1958, pp. 14–17.
- (14) *Ibid.*, p. 73.
- (15) *Ibid.*, pp. 127–128.
- (16) *Ibid.*, pp. 180–182.
- (17) George SAND, *Les Maîtres Sonneurs*, Garnier Frères, 1958, pp. 98–99.
- (18) *Ibid.*, p. 91.
- (19) Jean STAROBINSKI, *Jean-Jacques Rousseau Transparency and Obstruction*, Translated by Arthur Goldhammer, The University of Chicago Press, 1988, p. 85.